

74-1 林試の森公園と元東京競馬場（距離約 5.5km）



林試の森公園

賑やかな武蔵小山商店街をのぞいてから、品川用水跡の通りと羅漢寺川跡の緑道を歩いて、用水と河川の地形関係の違いを体感する。

そして、開発以前の地形が今も残る林試の森公園でゆっくり森林浴を楽しみ、目黒競馬場跡が今もくっきりと残る住宅街、そして八代将軍吉宗公ゆかりの祐天寺へと歩く。

【道順】

東急目黒線武蔵小山駅→武蔵小山商店街→品川用水跡→羅漢寺川跡緑道→林試の森北門→林試の森東門（→目黒不動尊）→目黒競馬場跡→目黒通り元競馬場前バス停→油面子育地蔵尊→天祖神社庚申塔→祐天寺→東急東横線祐天寺駅

【街歩き解説】

・品川用水

品川用水は、かつて玉川上水より分水して細川家下屋敷（現戸越公園）の池を潤していたが、本来は農業用水として引かれたものである。目黒川に至る全長 28km の用水は、それまで、畑地が中心で干害に悩まされていた戸越村など品川領二宿七村が幕府に願い出て寛文九年（一六六九）に完成させたものである。

用水の完成により、地域の田を潤し、畑地の農業生産も拡大し、江戸城下市民の消費に応えたという。現在品川用水は、すべて暗渠化されて姿を消している。

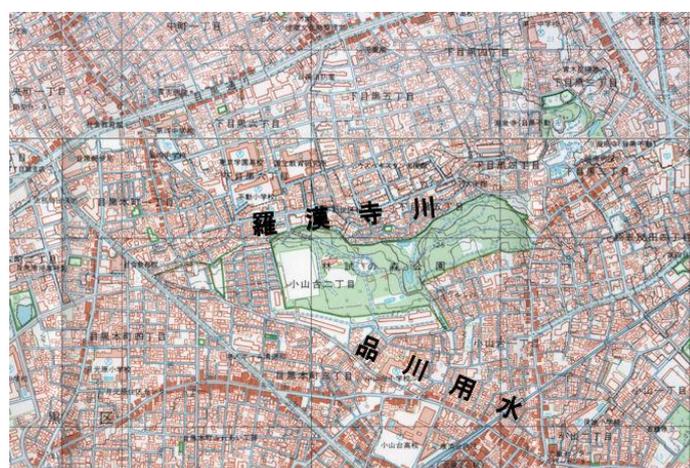
武蔵小山駅やや東にある、目黒線地下化以前の踏切跡から品川用水跡を表現する特徴的な道をたどって北西へと進む。

・羅漢寺川跡（緑道）

蛇行した風にも見える都道 420 号の北に並行した通りが、品川用水跡である。同通りを小山台小学校、林試の森公園を北に見て進み、小山台高校通りが都道 420 号に突き当たった、すぐに北から羅漢寺川の一つの流れが始まる。

羅漢寺川は、目黒区目黒本町 1 丁目の清水稲荷から発して、林試の森公園、目黒不動、五百羅漢寺を経て目黒川に注いでいたという小さな川（跡）である。都道 420 号から始まる誰の目にも河川跡であることが明らかな、ごく狭い羅漢寺川跡緑道を歩いて林試の森公園北門へと向かう。

羅漢寺川跡は左右に坂道を従えた沢の中を、これまで歩いてきた品川用水が尾根をたどってきたことが歴然とするはずだ。当然ながら、用水は効果的な配水を考慮した位置に造られている。



・林試の森公園

明治33年(1900年)に当時の農商務省林野整理局が「目黒試験苗圃」としてここに開園、その後林野庁「林業試験場」となる。さらに、同場が筑波研究学園都市へ移転したことに伴い平成元年6月1日に「都立林試の森公園」として生まれ変わった。

広場も、池も、林も、散策道も、せせらぎも、デイキャンプ場もある。多様な樹林と生き物に出会える林試の森公園へ北門から入り、森林浴を楽しむ。公園事務所で地図やパンフをいただいて、ここにある多くの巨木のほか、絶滅危惧種などを探してみるといい。公園内の樹林は、林試の開園などに沿って植樹したものだが、地形は開発以前の形が今なお残っているはずだから、往時を偲んで歩く。

・目黒競馬場跡

林試の森公園、そして目黒不動の北は、明治40年(1907)に開場したという目黒競馬場の跡地だ。昭和7年(1932)には、近代競馬の基幹競走となる東京優駿大競走(現在の日本ダービー)が創設され、記念すべき第1回はこの目黒の地で開催された。その後、宅地化による拡張・飲料水確保の困難さなどから、存続が難しい状況に追い込まれ、翌年春の開催を最後に当地での開催は終了し競馬場も廃止され、同年秋に竣工した現北多摩郡府中町(現・府中市)の東京競馬場に移転した。

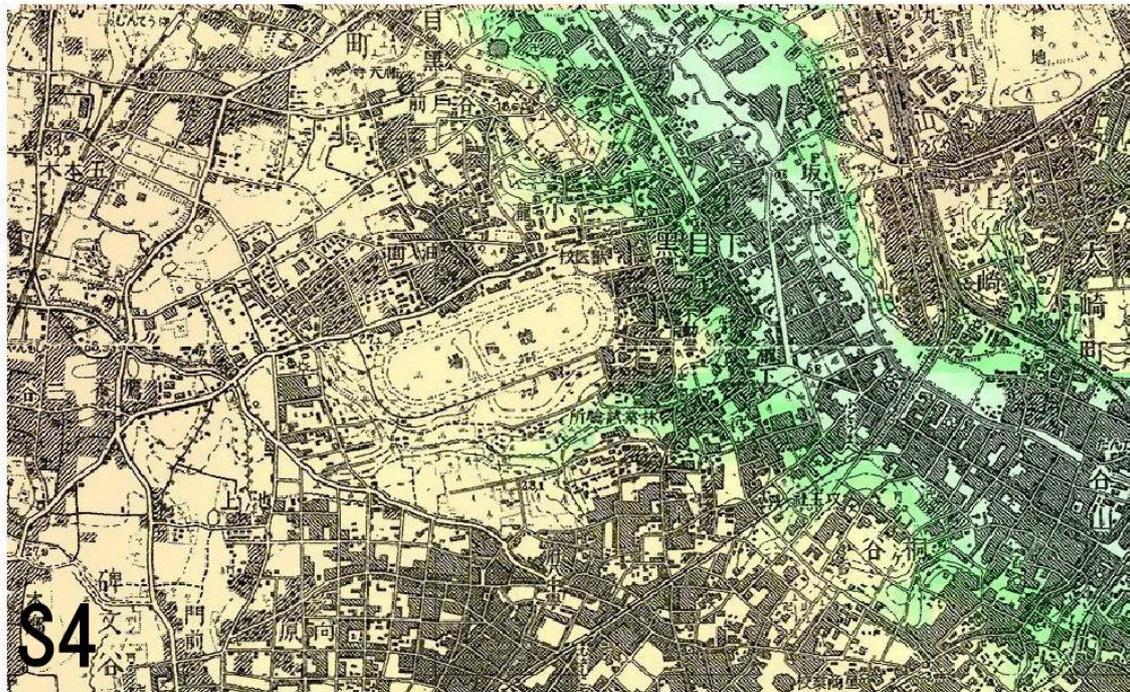
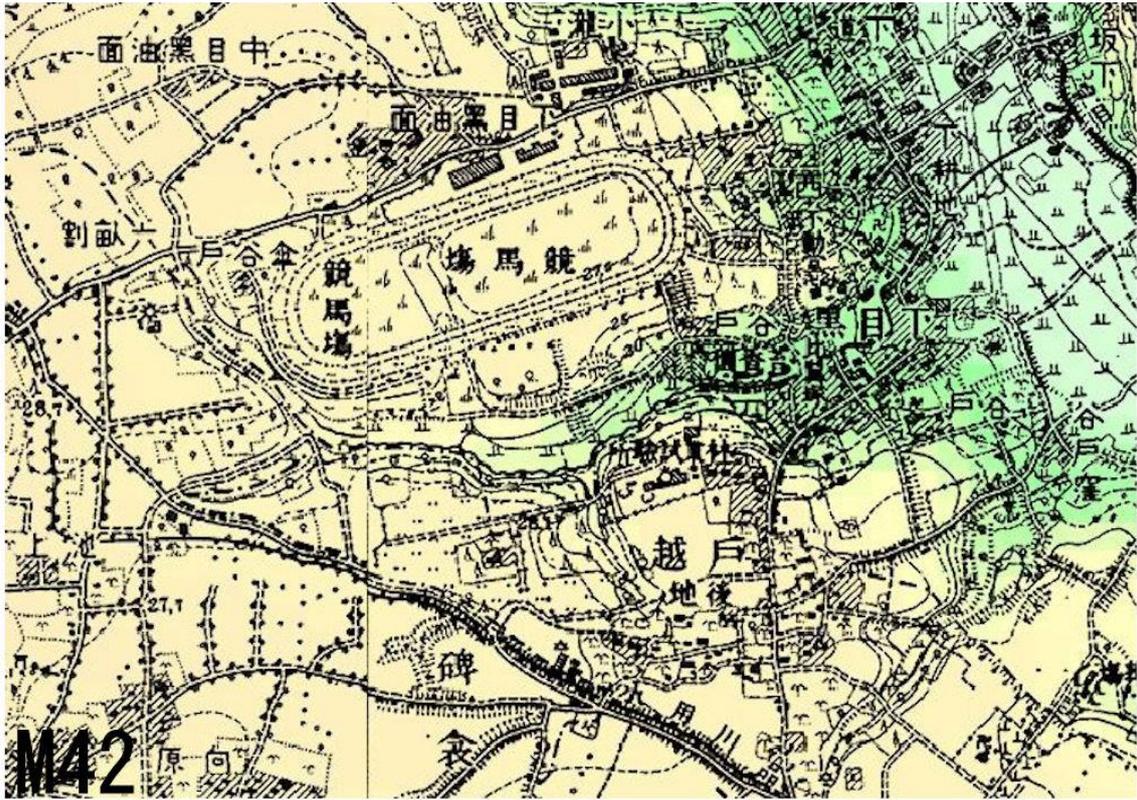
「目黒記念」は目黒競馬場にちなむレースである。現地には、コースの外周を示す道路が曲線を描いて残るほか、その名も元競馬場交差点には、当時の大種牡馬・トウルヌソルの馬像が建ち、元競馬場前というバス停もある。

東京周辺には、旧版地図から拾っただけでも、ほかに以下のような競馬場がある(いずれも正規の競馬場名称ではない)。

板橋競馬場、板橋競馬場、上野不忍池競馬場、戸山学校競馬場、招魂社競馬場、洲崎競馬場、松戸競馬場、柏競馬場、市川競馬場、吹上御苑の競馬場、三田育種場興農競馬場、池上競馬場、羽田競馬場、川崎競馬場、根岸競馬場、戸塚競馬場、八王子競馬場



目黒競馬場跡・トウルヌソルの馬像



油面子育地蔵尊

目黒通りの北には油面子育地蔵尊がある。かつては、目黒通り油面交番近くの小高い角地に立っていたが、昭和9年に、目黒通りの道路拡張のため現在地に移転されたという。土手の上であって、高さが2メートル以上あったので「高地蔵」とも呼ばれたとか。

「高地蔵」は、今も育児の厄除けに靈験あらたかな子育て地蔵尊として信仰される。毎年7月3日には、「夏の高地蔵まつり」が、商店街と地蔵講の共催で実施され、多くの参拝者でにぎわうという。

「油面」の地名は、江戸時代の中ごろから、この辺り一帯では菜種の栽培が盛んとなり、絞った菜種油は芝の増上寺や祐天寺の灯明用として使われた。この油の奉納に附随して、絞油業に対する租税が免除され、油製造により税が免ぜられている村、すなわち“油免”が、いつしか「油面」となったと伝えられる。

祐天寺

油面から谷底になった(祐天寺裏)交差点から一つの森のようになって見える祐天寺は、浄土宗の名刹として知られ、歴史の重みを感じさせる古びた山門や趣のある板塀などがある。開山は江戸中期の名僧祐天上人と高弟の祐海上人で、将軍吉宗より「明顯山祐天寺」の寺号が授与され、将軍の浄財喜捨や保護を受けるなど、徳川家と因縁のある寺として栄えてきた。庚申塔が残る天祖神社に立ち寄って、祐天寺駅へ出る。

ルートマップ



**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****